

第二十五回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

中島隆博 著 『共生のプラクシス 国家と宗教』

(2011. 10. 7 東京大学出版会 刊)

中島隆博 なかじま たかひろ 1964年11月3日生まれ。高知県南国市出身
中国哲学、比較哲学を専門とする。

東京大学法学部卒業、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退、東京大学文学部助
手、立命館大学文学部専任講師、同助教授、東京大学大学院総合文化研究科助教授、同
准教授を経て東京大学東洋文化研究所准教授。東京都在住。

著書に『残響の中国哲学 言語と政治』（東京大学出版会）、『ヒューマニティーズ 哲
学』（岩波書店）、『莊子 鶏となって時を告げよ』（岩波書店）、『共生のプラクシス
国家と宗教』（東京大学出版会）、『悪の哲学 中国哲学の想像力』（筑摩書房）

受賞のことば

願いということを最近よく考えるようになりました。何を思ったとか、何を行ったか
ではなく、その人は何を願ったのだろうかと考えます。ですので、この度このような大
きな賞をいただくことが決まったとき、すぐに去来したのは、和辻哲郎という日本近代最
大の知性は何を願っていたのだろうか、という問いでした。

無論、私はこれまで、中国の哲学を少し研究してきたにすぎず、どちらかと言いますと、
日本の哲学は敬して遠ざけてきましたので、和辻を論じることなどできようもありません。
しかし、中国の哲学に入って行けば行くほど、日本の哲学がそれとの葛藤の中にあること
を見過ごすわけにいかなくなってきたことも確かで、受賞作の中では偶然にも和辻の『孔
子』に言及することになりました。その『孔子』において、和辻は孔子の「思想」を「叙
述」することは「自分の全然興味を持たないところである」と述べています。そうではな
く、孔子と弟子の「思想葛藤」の生きた場面に肉薄し、いわば孔子の願いを受け止めるこ
とが大事だと言います。それこそが、普遍性を体現した「人類の教師」である孔子に対す
るふさわしい態度だということです。

おそらく今求められているのは、和辻が孔子に対して行ったような仕方で、和辻哲郎の
願いを受け止めることではないでしょうか。つまり、和辻の「思想」を「叙述」とい
うよりも、和辻の「思想葛藤」に迫り、その願いを最大限の可能性において考えること
です。私にそれができるかどうかはわかりませんが、この受賞をきっかけに、和辻哲郎さ
らには日本の哲学の願いにゆっくり近づいていきたいと思えます。ありがとうございました。

《選考委員評》

加藤尚武

さまざまな文化が、以前は、地球の上で別々の地域と時代に棲み分けていた。儒教、道教、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、仏教などの文化が、同じ場所と時間に共生し始めたのが二〇世紀後半からの世界文化の特徴である。同じ宗教のなかでの殺し合いも衰えてはいない。人類が持続的平和を達成するのに「他文化との共生」をどう受け止めるかという問題が、文化論の中心に浮かび上がって来た。

中島隆信「共生のプラクシス」が着目するのは、伝統文化そのもののなかですでにある共生の試みである。中国でもっとも影響力の大きかった儒教では「君子と小人」という異質の人間の共存が捉えられていた。それは支配階級と非支配階級、知識人と民衆という共存関係に投影してもいい。「中国思想において小人は閑居させられ続けた。君子の独や朋の影におかれ続けた」（45頁）という中島の結論は、現代中国においても民衆は主導権を持たないと解釈したくなる。

明の時代にキリスト教徒のマテオ・リッチと中国の仏教界との論争を中島は紹介して、肉食の禁止という伝統的な仏教思想の再評価を試みる。その伏線の延長上に、現代日本の仏教学者と生命倫理学との対話が分析されるが、そこから中島は「脳死者、中絶された胎児を死者として遇する」道を提案している。

中島の強みは、東洋思想の従来あまり顧みられることのなかった文献を再発掘すると同時に、現代の西洋思想についても借り物ではない理解を身につけていることである。現代の儒教思想家には、西洋思想を吸収して東西の合体というべき思想を組み立ててきた人々が存在するが、それについて中島は「もし現代の儒教が古今東西の共生のプラクシスに自らを開いていくとすれば、今後、まったく新しい事態が生じてくるかもしれない。」（253頁）と期待を表明している。

古今東西というスクリーンに思想をすべて投影してみる営みが共生のために不可欠であることを中島は告げている。

関根 清三

中島隆博氏の『共生のプラクシス—国家と宗教』は、国家と宗教という、現実の、然ししばしば閉じて固定的となりがちな共同性についての考察から出発する。しかしその脱構築に自覚的にこだわり、そこでの緊張や歪みから解き放たれた、来たるべき共生を実現するプラクシスを、粘り強く模索するのである。デリダ、ドゥルーズから仏教や現代日本の生命倫理まで縦横に論じつつも、古今の中国哲学との批判的対論を中心に据えて、〈他者と共に生きることが如何にして可能か〉を一貫して問うた御労作である。

学術部門の受賞作は、過去大半は西洋関係の作品であった。二十四回のうち、東洋関係のものは四作のみ、しかもその全てが日本関係だったのである。今回、中国の儒教思想に焦点を合わせて論じ切った氏のお仕事を受賞作に得たことは、和辻賞の歴史においても、またこの国の中国思想研究の将来にとっても、慶ばしいことであるに違いない。

三部構成の第I部では、原初の共同性について考察される。元来の朱子学、そして明代

のその批判的展開、更にはデリダの共同体の脱構築論がここでは俎上に載せられる。そして小人が独り閑居しないで他者とつながりを付けていくところに、却って君子が陥る可能性のある巨悪を抑制する可能性が開けないかという大胆な発問をする。そこに著者が探る、ダイナミックに開かれた人間同士の「渦巻きの共同性」を、更に仏教のラディカリズムが押し広げ、動物や死者をも含みこんだ共生を開く方向が、第Ⅱ部で剔抉される。ここでは、儒教よりも道教的な中国に希望を託したドゥルーズも参看され、現代日本の生命倫理に対する提言もなされ、考察はいっそう光彩を放つ。最後の第Ⅲ部では、現代中国の儒教復興が、国家と宗教の関係を脱構築的に批判し、更には儒教自らの言説の限界に対する批判をも包含した「批判儒教」の方向に進むべきであり、現在称揚されている「和」に代えて「義」の強調、すなわち他者たちに正義を返す方向の批判的な称揚こそが求められるという展望が開かれて、一連の考察は結ばれるのである。

現実の問題の広表と多岐を丹念に見極め、しかも該博な古今東西の哲学的知識を駆使して、それらを多面的な問いと答えで揺さぶり精錬して行く、その思索の強靱さと閃きに、選者は感銘を覚えた。

なお惜しくも選にもれたけれど、ハイデgger、西田幾多郎、レヴィナスらの形而上学とその限界を論じ、新しい形而上学の展望を開こうとした斎藤慶典氏の『「実在」の形而上学』の深々とした思索、『ポリテイア』をめぐる我が国の翻訳史や、海外の解釈史を踏まえた納富信留氏の『プラトン 理想国の現在』の独自の解釈にも、選者は多くを学んだことを申し添え、今年度のこの国の思想研究の豊かな実りに敬意を表したい。

黒住 真

中国思想について、従来日本での研究は、「哲学」と称されても、その内実は、経典解釈の列挙に止まる事例が多かった。それを乗り越える場合も、唯物論か観念論かといった構造や、マルクス主義や政治観あるいは国家権などがそこに結び付いた。さもなければ、哲学といっても、個別的な調査研究にとどまり続けた。——このように断言するのは強引なのだろう。たとえ、そうした哲学以前ないし哲学以後というべき傾向があったとしても、中国思想を実際に「哲学」ととらえる動きがいくつもあったに違いない。その哲学を語る学科や学術誌もあり、内実をもっと十分に知るべきである。だが、そうだとすると、私ども外部の人には、それはあまり判らなかつたのである。

これらのことには、実は「哲学」が持つ状況と歴史とが結び付いている。すなわち、哲学は、東アジアにおいては、一般的に、イデオロギーでなければ、欧米思想の何かを輸入・判断権にすることが多かつた。また、特に現代日本では強いことだが、「哲学」が、二十世紀末からは、学問や文化における地位をかなり失いつつあった。そのような重層的な運命を、近来の中国・日本の哲学は担って来た。

中島隆博氏はこのような事態に抗して「中国哲学」を形成する、現在ほとんど僅かなしかしとても重要な人である。ただし「中国哲学」はご自身が好き好んで用いる用語ではないと思う。中島氏は、従来から、個々の中国思想家たちに踏み込み、また中国・日本での中国哲学史をも十分おさえるが、それだけでなく、フランソワ・ジュリアン (François Jullien, 1951-) をはじめとする西欧の中国研究なども踏まえる。しかも、氏の仕事

は、ただの中国学でも哲学史でもなく、ご自身の哲学・倫理学の構築にもなって来た。こうしたまさに哲学的営みのひとつの集大成というべきものが本書『共生のプラクシス——国家と宗教』である。

本書での中島氏は、実際にとっても視野が広く深い。孔孟・老荘はもちろん、様々な時代の思想家の姿をもとらえる。そこに儒教・仏教・道家などの系統を越えた哲学的また倫理的な把握を行っていく。また、そこから、熊十力(1885-1968)、牟宗三(1909-1995)、梁漱溟(1893-1988)といった、マルクス主義に収束しない新儒家・新仏家というべき人たちの動きをも追う。また、東アジアを知る近代日本の哲学者たちにも触れていく。そして、レヴィナス(Emmanuel Lévinas, 1906-1995)、ドゥルーズ(Gilles Deleuze, 1925-1995)、デリダ(Jacques Derrida, 1930-2004)といった二十世紀の重要な哲学・倫理学者の論理をも用いる。本書は、歴史を踏まえながら形成された二十世紀末以後地球化の構造における哲学書・倫理学書だといえる。

では、そこで求め示そうとする物事は何なのか。表立った流れとして、近代西欧的な主体観を越えた、他者あつての自己、また平等への志向、共生に向かう実践が指摘されている。だが、さらに様々な次元と問題がとらえられており、読者はその形態を各自それぞれ辿っていく必要がある。本書は、はっきり述べていないが、大きくは20世紀の国家・殺し合い・イデオロギーなどに収斂しない実践を求めている、と私には思われ、その意味でも、個々に学び同意すると共に、それは方向として日本の哲学の在り方でもある、と思った。

読者として本書からさらに求めたい物事は何だろうか。私自身は、まずは、比較されるキリスト教・仏教・儒教・道教などの内実や形成史にもっと十分入って欲しいと思った。このことは更に「宗教」が、またそれに関わる「哲学」が一体何なのか、ということにも繋がる。またプラクシス(実践・活動)においては、気・エネルギーのようなものがあり、また元来のギリシアや東アジアでは天地自然とも重なる根本的な世界観・宇宙観のようなものがあつた。それらは一体どうなのだろうか。そして現在、中国・日本において、結局のところ共生のため必要なのは、国家だけでない、語としての公共だけでない、本当の「社会」的組織である。こうした物事をさらに、と願った。

だが、これらは中島氏の別著に求めるべきだし、本書についていえば実践におけるいわば完成態を示せというに等しい。それらは、中島氏の諸著書をより十分に読み込んだ上での、最終的に読者各自の仕事なのだろう。本書は、中国や日本の読者に、また哲学自身に、重要な方向を示して下さっている。そこから出来るだけ大きな希望をもちたい。